



バイオリンを売る

古訓に曰く「君子は貧に安んじる①」、また曰く「疏食を食らい水を飲む。肱(ひじ)を曲げて枕とす。楽しみその中にあり。②」

私が「貧に安んじている」のはそのとおりだが、楽しみはその中にはない。理由は「貧」のほかに「病」が加わっているからだ。貧には安んじていられるが病には安んじてはいられない。貧と病の両者が共に迫ってきたときに、どうして楽しみが得られよう。それでただただ、夜も昼も苦しい思いをしているのだ。

①原文は「君子安貧」。唐の王勃の詩「所頼君子安貧、達人知命」より採られている。

②原文は「飲疏食、飲料水、曲肱而枕、楽在其中矣」。論語の中の一節で次に「不義而富且貴。於我如浮雲。」が続く。

病を抱えて半年、初夏となり、春はすでにひそやかに去った。心中を覆うのは憂いの灰色の層、生の気力は持ち去られたような気分で、空虚と静寂が周囲に満ちている。

医者が指示した。「これから少なくとも一年休養してからでないと仕事をすることはできない。休養時は絶対に安静にしていなくてはならない。動きまわったり考えたりするのは少なくし、睡眠を多くとり、滋養のある食べ物をとること。」

私はこれらの中で、できるだけことはやった。朝晩の草むらの散歩と花や野菜を栽培すること以外、ほとんどどこにも出かけなかった。毎日ぼんやりと座っては暇つぶしに本を読み、たまに友人と世間話をしたが、憂慮すべき国家の時事や怒りを誘発

するこの世の事についての話はしなかった。少しずつ日記を書いたり手紙を書いたりすることができるようになったが、わずか数行にとどまった。

食事については、最初は一週間にニワトリを一羽は食べようと計画していたが、半値にしか値下げしてもらえず、毎月 100 元あまりを費やして二羽だけ食べるのがやっとだった。この状況が維持されたのは二か月だけで、それからはまったく食べなくなった。ときには豚のレバーを買ってそれに代えることもあったが、それも中断してしまった。もし毎日食べたとしたら、五、六元はかかるからだ。それでここ一か月はまったくの菜食だった。当然少し消化不良を起こし、加えて酷暑のために日に日に痩せていった。それに、秋の終わりから執筆をスタートさせようと考えていたストーリーの構想も練らなくてはならない。こうなると「完全休養」の決まりを破るしかなく、その結果すぐに悲観的な健康状態に陥った。

なぜ私はこのようになったのだろうか？ 私は生きていたいと思っははいないのか？ 左明③、朱双雲④、舒暢といった友人たちの死は、私の目を覚まさせるには十分な教訓ではなかったとでも言うのか？ いや、そうではない。私は彼らの後を追いたいとは決して思っていない。私はこの世にまだ留まり、どれほど困難なことがあってもそれを喜んで引き受けるつもりだ。しかし実際的に、経済問題が私を脅かしはじめていたのだ。

③左明(左明(1902-1941)……左翼の文学家として抗日戦で宣伝活動に従事した。

④朱双雲(1889-1942)……劇作家、演劇研究科。抗日戦で宣伝活動に従事した

四か月間、私は本を売って病後の生活を支えた。これが、私が心安らかに生きていけるただ一つの方法だったからだ。私は貧しさを訴え友達に助けを求めることをよしとしなかった（とくに紙の上で語るのははじめてのことだ）。私は、このご時世では誰もが同様に、誰かが誰かよりも良い生活をしていることはないとわかっていた。

友人が十分な状態であるように手助けすることはできず、ましてや友人を搾取などできはしない。それは極悪というものだ。万が一にでもすべきではない。だから、これまで友人たちは私の口から苦しいという訴えを聞いたことはなく、私がみすぼらしい姿をしているのを見たこともない。私は無理にでも歯をくいしばって生きている。

一か月前、私は売れるものをほとんど売りつくしていた。「生」は私をパニックに陥れようと魔の手を伸ばしてきた。私は己の無能を恥じ、お金の残酷さを憎み、なぜ健康な体を下さらなかったのかと天を責めた。私は震えた。いったいどうしたらいいのだ！

そうだ、いい考えが浮かんだ。私は突然、宝ものを持って来たのを思い出した。それは上海から南京、華北、武漢と、私と共に長い間流浪の旅を続けて四川にやってきた一丁のバイオリンだ。抗日戦が始まっていろいろ心身ともに不安定な中、バイオリンとともに歌を歌おうという気持ちの余裕がなかった。トランクの中でほこりをかぶっているのを取り出して弾こうと思うたびに、結局は興味を失って、心の中では気がとがめていた。しかし今回はそうではない。切実な状況があるのだ。私はそれをトランクの中から取り出してほこりを払い、ケース、カバー、弦、弓を修理し、完璧な状態にして、小さな優しい声で話しかけた。

「バイオリンよ、お願いだから「売身救主〔身を捨てて主を救う〕」を奏でに行っておくれ。万が一知音⑤の手に渡れば、私のそばにいて一年中閉じられたトランクの中にいて寒さに震えているよりはずっとましではないか？「不成功即成仁⑥」。お前はまだまだ私が芸術的な成功をおさめるのに助けとはなってくれてはいないが、私の窮状を救うために、あるいは道義的に「仁を成す」ことになる。だから、お前にはずっと感謝している。永遠にお前のことを忘れない！ さようなら、バイオリンよ、これしか方法がないのだと許しておくれ。もし私がこの世に住むことができれば、私に与えてくれたお前の恩義に決して背くことはない。」

⑤知音……春秋時代の琴の名人伯牙が、親友の鍾子期が亡くなったあと、「自分の琴の音を理解する者はもういなくなったと言って愛用していた琴の糸を切ってしまった」という故事から、「何でもわかり合える友人」を知音という。ここでは「バイオリンの音、音楽を理解することのできる人」の意味で使われている。

⑥不成功即成仁……『論語』の中の一句。意味は「成功しなかったら、正義のために身を犠牲にすることが仁を成すことにつながる、という意味。」

このようにくどくどと言いつつをしたあと、そっとバイオリンに口づけをして、その体に「1200 元」と書いた紙を貼った。そして競売店のカウンターに持っていった。バイオリンのそばから離れるとき、私の眼は濡れていた。私は振り返って見る勇気がなく、ただうなだれて黙々と家に戻っていった。

二週間ぐらい過ぎたとき、「売るのをやめよう」という考えがふと浮かんできた。私は前にも言ったように、決してバイオリンを犠牲にしたいはなかったのだ。こう決めるとすぐに競売店に向かった。カウンターの中には私のあのバイオリンはなかった。冷水を浴びせられたようになり、気を失いかけた。やっとのことで私はぶるぶる震える声で店主に尋ねた。

「バイオリンは？ 私のバイオリンは？ 持って帰ります。売りません。」

店主は何も言わず、ただ会計のところに行って紙幣を一束取ってくると、一枚の紙と一緒にそれを渡した。紙には「売値 1200 元、手数料 120 元、残り 1080 元」と書いてあった。お金を受け取った以上、私に何が言えよう。私は沈み込んでそれを握りしめて戻ってきた。家に入るとこらえきれなくて泣きだした！ 私は貧しさに泣いたのではない、私が泣いたのは「貧しさ」ゆえに恥知らずな行いをしたからだ！ 芸術を愛し芸術に従事している者が、今、飢えに耐えられなくて、助け合って生きてきた芸術品を売り払ったのだ。

自分の魂を売ると何の違もない。何と恥知らずな事だろう！ 私はこのバイオリンを売った金で米と小麦粉を買いに行くのが恥ずかしい。私は何度も考え、もらった紙幣をそのまま持って店主のところに行き、バイオリン請け出したいと懇願し、たとえ弁償金を取られようとかまわないと言った。しかし彼は答えた。「バイオリンはもう売れました。取り戻すことはできません。」

私は失望した。どうしようもない中、ただ焦って何とかして買い手の名前を聞きだすしかないと思った。直接買い手と相談しようと考えたのだ。高値でもいいから買い戻したいと心から願った。しかしバイオリンはすでに落札されていて「買い主と交渉したい」と店主に言う前に、「バイオリンはもう買った人がどこかに持っていったよ」とだれかが私に言った。ああ、自分のバイオリンと最後の対面を果たす縁もなかったとは！ 私はどれほど悲しみ、己を恥じたことか。手にしている紙幣をびりびり引き裂きたかった。私は自分の手で頬を叩いて言った。「死んだほうがましだ。自分のバイオリンを売った金で腹を満たすことなんかできない！」

しかし、私のバイオリンはすでに遠く離れ、永遠に私とさよならをしたのだ。バイオリンよ！ 私にはもう何のぜいたくな望みもない、ただ昼も夜も天に祈っている、お前が良い人に買ってもらえるようにと。その人が、最初は好きになり、それから冷たくなり、最後にはお前を捨ててしまうような、無情で義理を欠いた私のような人間ではありませんように。私は本当にお前に会わせる顔がない。もしも将来お前の姉妹に会うようなことがあっても、高望みをしてお付き合いをするようなことは決してしないだろう。私はこれから永遠に、あの曲を弾かないと誓った。すまないと思う心を抱いたまま、いつも黙ってお前のことを思い出し、許しを請いつづけることだろう。

1942年8月10日、朝、北碚“琴廬”にて

初出『文芸先鋒』⑦1942, 10, 10. 第一巻第一期

⑦『文芸先鋒』……国民党中央文化活動委員会の文芸出版物。1942年10月に重慶で発刊され、1948年9月の13巻3期まで続いた。

